

一九六〇年代以降、近世日本の豪農・豪商（中間層）は近世中期以降に支配機構の末端となり、小前・貧農層と敵対的な関係にあったと論じられていたが⁽¹⁾、一九八〇年代以降は豪農・豪商の類型化がなされ、様々な立場性のものがいたと論じられるようになってきた。特に、自らの村・町を中心にして活動していたものは、在村型豪農Ⅰ（活動の基盤を村に置き、自己の経営発展の不可欠の前提として一般の農民層の経営の維持・安定、村落共同体の再編を重視する「村との共生志向型豪農」）と在村型豪農Ⅱ（自己の経営拡大・利益追求が中心目的である「自己経営最優先型豪農」）に大別され⁽²⁾、その立場性の相違は専ら《経営規模の差異》によって生じてくると論じられてきた⁽³⁾。しかし、従来の豪農論・中間層論では豪農・豪商の経営分析に焦点が据えられており、彼らの思想にまで踏み込んだ研究は少なかった。思想史の領域では、豪農論・中間層論における豪農・豪商の一面的な捉え方を批判し、豪農・豪商の思想分析を行い、村落共同体との共生を志向していたと論じる研究者もいたが⁽⁴⁾、その研究は「伝記」や著作のテキスト分析に終始しており、経営分析を行っていないかった。豪農・豪商が常に思索にふけていたわけではなく、彼らの主要な関心の一つには必ず《家》の経営があったと想定されることを踏まえれば、テキスト分析のみで彼らが村落共同体との共生を志向していたとは論じられない。よって、豪農・豪商の立場性を詳らかにするためにはテキスト分析と経営分析を組み合わせ、彼らの思想の形成過程を検討する必要がある。さらに、最近の

書物研究の手法に学ばば、豪農・豪商の蔵書形成・書物受容や、その背景にある書物流通・書物貸借の状況を検討した上で思想形成を論じる必要があるかと思われる。右の研究状況を踏まえ、本書では、近世日本の豪農・豪商の一事例として北奥地域（現東北地方北部）の豪農・豪商を取り上げ、十九世紀前半の彼らの思想形成（蔵書形成・書物受容）について彼ら自身の経営の実態や当該地域の社会・経済状況とともに検討し、その上で彼らの立場性を分岐させた要因について考察していく。具体的には、八戸藩領陸奥国九戸郡軽米町（現岩手県九戸郡軽米町）の豪農・淵沢家（屋号：元屋）と八戸城下廿八日町（現青森県八戸市）の豪商・石橋家（屋号：西町屋）の人びとを取り上げるが、その中でも特に分析の中心となる人物は淵沢円右衛門定啓（後諱：定長／？～一八七二）と石橋徳右衛門憲勝（前諱：寿盈／一七三二～一八〇四）であり、主に両者の比較から近世後期北奥の豪農・豪商の立場性と、その立場性の相違が生じてくる理由・契機を明らかにしていく。

なお、本書で取り上げようとしている南部地方（盛岡藩領・八戸藩領／現青森県東部・岩手県中北部）は、戦前から凶作・飢饉が頻発する《後進地帯》と見なされてきた。凶作・飢饉が頻発していたために、戦前から凶作・飢饉の事例として取り上げられることはあったものの、^⑥相対的に事例研究の蓄積は浅く、凶作・飢饉の頻発地Ⅱ《後進地帯》という暗く平板なイメージで語られることが多かった。また、他地域の豪農・豪商に相当する名子主的村落支配者層（以下「名子主層」と省略）は凶作・飢饉時の救済の対価として貧農層を「名子」（隸属小農）や「下人・下女」（奉公人）として取り込み、名子・奉公人の使役によつて農業・商業を大規模に展開していたと論じられていたため、^⑦南部地方の暗く平板なイメージを補強する存在となっていた。一九三〇年代から民俗学者・歴史学者の一部は南部地方の後進性の是正のために名子主層の研究を行うようになったものの、^⑧一九七〇年代以降は名子主層への関心は徐々に稀薄

化していった。⁽⁹⁾二〇一一年の東日本大震災は「東北」・「災害」などへの関心を相対的に高め、結果的に「東北」・「災害」関連の研究を促す契機になったと推察されるが、名子主層の研究が盛んになったとは言いがたい。南部地方で凶作・飢饉が頻発していたとするならば、その凶作・飢饉の社会・経済・政治的な背景なども合わせて論じる必要があるが、南部地方の社会・経済・政治的な背景の解明のために名子主層の研究を行おうとするものは少ない。結果的に、南部地方の名子・貧農層は名子主層によって使役されていたという従来からのイメージも、批判されないまま固定化されている。⁽¹⁰⁾このような南部地方の暗く平板なイメージの再生産に歯止めをかけ、より正確な理解を助けることも本書の目的の一つである。そのためには、後進性の象徴たる名子主層⇨豪農・豪商を「層」として捉えるだけでは不十分であり、ある程度「多様」な存在であったという可能性を排除しないことが出発点になる。無論、南部地方に限らず、近世日本の豪農・豪商が「国」・「村」・「家」などによって規定されていたことは先行研究で繰り返し論じられてきており、その点を軽視するつもりはないが、豪農・豪商の「多様」さを直視する必要は出てこよう。⁽¹¹⁾

あらかじめ補足しておく、本書では近世後期北奥の豪農・豪商が多種多様な書物を読み、特に朱子学（儒学一派）を熱心に学び、かつ政治批判を展開するに至っていたことを明らかにしている。朱子学が中国宋代に形作られ、東アジア諸国（中国・朝鮮・日本・琉球・越南）に多大な影響を与えるようになっていったことを想起すれば、⁽¹²⁾本書はその過程の一コマを描いたとも言えるが、従来、儒学史上に北奥地域の思想動向を明確に位置づけた研究はなかった。そのことを踏まえれば、本書には儒学史の叙述を豊富にする意義もあると思われる。

- (1) 佐々木潤之介「宝暦期の位置づけについて」(『歴史学研究』三〇四、一九六五年)／同「維新変革の現代的視点」(『歴史学研究』三二二、一九六七年)／同「幕末社会論」(塙書房、一九六九年)。
- (2) 渡辺尚志「幕末維新时期における農民と村落共同体」(『歴史評論』四七五、一九八九年)／同編「近代移行期の名望家と地域・国家」(名著出版、二〇〇七年)／同「百姓の力」(柏書房、二〇〇八年)。
- (3) 岩田浩太郎「豪農経営と地域編成」(一)～(四)／(『山形大学紀要社会科学』三二(二)・三三(一)・三三(二)・三四(一)、二〇〇二・二〇〇三年)。
- (4) 宮城公子「日本近代化と豪農思想——杉田仙十郎・定一について」(『日本史研究』九五、一九六八年)など。
- (5) 若尾政希「『書物の思想史』研究序説」(『一橋論叢』一三四(四)、二〇〇五年)／同「近世人の蔵書形成と書物の流通」(『日本文学』五七(一〇)、二〇〇七年)。
- (6) 森嘉兵衛「旧南部藩に於ける天明の飢饉」(『社会経済史学』二(一)、一九三三年)／同「旧南部藩に於ける宝暦度の飢饉と其の対策」(『歴史教育』八(四)・(五)、一九三三年)。
- (7) 森嘉兵衛『九戸地方史上・下巻』(九戸地方史刊行会、一九六九・一九七〇年)など。
- (8) 小野武夫・森嘉兵衛『旧南部領に於ける名子制度』(法政大学政経学会、一九三三年)など。
- (9) 菊池勇夫『東北から考える近世史』(清文堂出版、二〇一二年)。
- (10) 元々、南部地方は古代日本の周縁であり、「蝦夷」・「俘囚」などの居住地Ⅱ「化外の地」として差別されてきた。しかも、近世日本でも、医師・橋南谿(一七五三～一八〇五)の紀行文『東遊記後篇』一七二一〇八六(「内閣文庫 国立公文書館所蔵」)に「南部・津軽辺の地名にハ蛮名多し：南部・津軽辺の村民も大かたハエゾ種なるべし」とあるように、南部地方の人びとへの差別意識が完全に払拭されたわけではなかった。そのような差別意識も、南部地方の暗く平板なイメージの形成に寄与していると推察される。
- (11) 国籍・地域・階層・男女の違いや障害の有無などによって規定されるものの、個々人が「多様な存在であることは自明に近いと思われる。もちろん、実際には多様性を認めず、特定の集団を差別・

抑圧することもしばしば行われてきた。人間が他者を十全に理解することはできないのかもしれないが、少なくとも多様性を前提としない限り、より実相に近い認識は得られないであろう。

(12) 清水光明編『「近世化」論と日本——「東アジア」の捉え方をめぐって』(アジア遊学 185、勉誠出版、二〇一五年) など。

SAMPLE

SAMPLE

目次

まえがき……………(1)

序章 本書の課題……………1

はじめに……………1

第一節 研究史整理……………1

第二節 本書の課題……………11

第三節 八戸藩の概要……………15

第一章 淵沢定啓の蔵書形成……………41

はじめに……………41

第二節 軽米町淵沢家の概要……………43

第二節 淵沢定啓の蔵書形成……………61

第三節 『四書示蒙句解』抜書の特徴……………75

おわりに……………82

第二章	淵沢定啓の書物受容	109
	はじめに	109
	第一節 天保期の書物受容	112
	第二節 弘化・嘉永期の書物受容	133
	第三節 安政期の書物受容	141
	おわりに	154
第三章	淵沢定啓の経営思想	193
	はじめに	193
	第一節 淵沢家経営の概況	195
	第二節 「国産」政策への関与の影響	206
	第三節 飢民救済活動の責務	219
	おわりに	227
第四章	淵沢定啓の鉄山支配	259
	はじめに	259

第一節 「鉄山支配人」の性格	263
第二節 「鉄山支配人」の経営	273
おわりに	291
第五章 石橋憲勝の経営思想	305
はじめに	305
第一節 寛延・宝暦飢饉の影響	308
第二節 石橋憲勝の飢饉対策	320
第三節 石橋憲勝の書物受容	336
おわりに	355
第六章 八戸藩領の書物流通	377
はじめに	377
第一節 「大仲間」の概要	379
第二節 「大仲間」以外の活動	388
第三節 「書物仲間」の影響	396

おわりに	402
終章 本書の成果と今後の課題	423
はじめに	423
第一節 北奥地域の《地域性》	425
第二節 十九世紀前半の《時代性》	430
第三節 益軒研究に関する論点	435
おわりに	445
あとがき	451
初出一覧	457
索引	左1